

ソ連版画家にあてた魯迅の書簡

川 上 久 寿

ソ連の版画芸術家たちにあてた魯迅の手紙がある。それには2通あって、1通はエリ・エス・ヒヂンスキイ (Л. С. Хижинский), エヌ・ヴェ・アレクセーエフ (Н. В. Алексеев), エス・エム・ポヂャールスキイ (С. М. Пожарский), エス・エム・モチャーロフ (С. М. Мочалов), デ・イ・ミトロヒン (Д. И. Митрохин) あてのもので、1934年1月6日の日付になっている。もう1通は1934年10月27日付のもので、クラヴチェンコ、ゴンチャロフなどにあてたということがわかっているだけで、その他内容などはいっさいわからない。こういう書簡があるということはかねてから知られてはいた。張望の『魯迅美術活動年譜 (初稿)』(『魯迅論美術』編者 張望, 出版社 人民美術出版社, 発行所 新華書店, 1956年, 215頁~234頁, 以下略して『年譜』という)に、「1月9日 モスクワの版画家アレクセーエフ等に手紙を出す」(一月九日 寄莫斯科木刻家亜力舎夫等信)とあるのがまえの1通である。『年譜』には日付が1月9日とあるが、ソ連で発見された魯迅の手紙の日付が1月6日なのだから『年譜』の1月9日は間違いと断定してよい。ここで問題にするのは1月6日付のものにかぎる。ところで、魯迅のこの手紙はいつ、どこで、だれによって発見されたのだろうか、大いに興味をそそる問題である。

中ソ両国の文化交流と友好関係の増進に尽力しているエル・ベロウソフ (Р. Белоусов) というひとに『何千の漢字に』(“В Тысячах Иероглифов”) という書物があって、その1篇に『掘り出し物』なる文章がある。それは問題の魯迅書簡につき次のように書いている。

「いまや魯迅とソ連芸術家との関係につき新たに詳しいことが判明し、興味ふかい事実としてよく知られている。それは曹靖華の追憶記(『花』を

指す——川上)とさして遠からざる以前ソ連芸術家たちによせた魯迅書簡に負うところ大である。この書簡のほうはいまのところあまり知られておらず、魯迅の祖国たる中国においてすら知るものは少ないだろう、それだけに貴重な文献である。」

「魯迅はレニングラードから72点の版画をうけとると、ソビエトの友人たちに礼状をしたためた。これまでわれわれはこの魯迅書簡についてはかれの日記的なメモから知りえたにとどまっていた。これは既刊の魯迅書簡集のどれをとってみても収められていない。魯迅がソビエト芸術家たちに何を書きおくれたかは不明のままだった。ところが、何年も経過して突然、まったく予想外にもひよいと発見されたのである。これこそ容易にお目にかかれぬ掘りだし物というべきだろう。それはレニングラードの芸術家エリ・エス・ヒヂンスキイの文庫から出てきた。もっとも、それが中国語でなくロシア語で手書されていることからみると、そのころ帰国していた曹靖華が魯迅の依頼をうけて翻訳したものらしい。中国語による原文は残されていない。したがって、魯迅の手で書き写された翻訳が発見されたということはきわめて大きな価値をもっている。

曹靖華の翻訳したこの手紙は完全なものである。」

以上ペロウソフの『掘り出し物』によると、ソ連の版画家にあてた魯迅書簡はレニングラードのヒヂンスキイの文庫から、それもさして遠からざる時期に発見されたのである。前述のペロウソフの著書は1963年刊であるから、「さして遠からざる」その時はたぶん60年代であって50年代ではなさそうである。この本は発見の年月日を明記していないから、それは今後の調査にまたねばならない。こういうわけで、ソ連版画家あての魯迅書簡は何年も前からソ連では公表されていたのである。ところが、肝腎の中国、それに日本においてこの書簡の内容が知られずにきたということはおどろきであり、われわれにとってはショッキングでさえある。まずはとりあえずこの書簡をここに全訳しよう。

敬愛する同志 エリ・エス・ヒヂンスキイ、エヌ・ヴェ・アレクセーエフ、エス・エム・ポチャールスキイ、エス・エム・モチャーロフ、デ・イ・ミトロヒン！

ご寄贈の作品をありがたく落掌いたしました。嬉しくてたまりません。多少の困難はまぬかれませんでした。上海でこれらの作品の展覧会をひらくことができました。参観にやって来たのは、中国の若い版画家や芸術専攻の学生など主に上海の革命的な青年たちです。展覧会は大好評を博しましたので、われわれはまるで天にもものぼる心地であります。反動新聞でさえあなたがたの成果をみとめないわけにはゆきませんでした。現在あなたがたや他のソビエト版画家の作品を再版しようという計画が進行中です。と申しますのは、中国の革命的青年はあなたがたの作品がとても好きで、また学ぶところも多いからです。残念なのは、あなたがたのことを詳しく知らないという点です。皆さまめいめいの簡単な経歴をお知らせねがえないでしょうか。ファヴォールスキイさんやその他すぐれたソビエト版画家の経歴がほしいのです、どうぞよろしくお取りはからいくくださるようお願い申し上げます。

後日、13世紀の挿画入り中国古書を数冊お送りいたしましょう。それにまた、石版印刷本も3冊お送りするつもりです。中国でそれらは稀覯書になっているもので、木版印刷の3冊などはまず博物館に入れる値うちがあるといってもよいほどです。これは中世中国芸術の研究という点からみると、あなたがたにとっては興味あることでしょう。現在ではこの芸術もほろんでしまい、昔の名人は「姿をけし」、若い世代の弟子はほとんどいないといってもよいありさまです。19世紀の90年代においてこういう木刻家を見つけることはむずかしくなっておりました。(ついでながら申しそえますと、そのようにかれら呼んでも差支えありません。なぜなら、かれらは自ら画くことをせず、ただ名高い画家の原画を木にコピーするにすぎないからです。)現在のこされているものといえ、挿画つきの詩人用書画紙ですが、それすら年寄りの愛書家と若いエキスパートがいまなお毛筆を愛用して

いる華北にかぎられます。しかし版画の立場からすれば、これらのものも古来の中国版画の最近における見本として興味があります。われわれは版画を愛好する友人数名をかたらって、『北京箋譜』の出版準備をすすめております。2月に出版ということになるでしょうから、その節は謹呈させていただきます。ソ連の版画家や彫刻家と直接の関係をむすべないのは遺憾なことです。私が個人的にお送りしたものがソビエト版画家のどなたにとっても贈物となれるようにと願っています。

新らしい版画(ヨーロッパの)は中国ではまだよく知られておりません。中国の若い左翼芸術家たちがソビエトやドイツの版画を知ってから、つまり、一昨年からのことですが、この芸術の研究がはじまりました。われわれは技術教育のため日本の或る版画家(内山嘉吉氏のこと——川上)を招きました。しかし当時としては、ほとんどすべての版画愛好家は左翼のもので革命的傾向をおびていましたから、労働者やメーデーなどとした赤旗を画いたものがあらわれはじめました。そういう版画が真理の前に戦慄する白い支配者のお気にめさぬことはいうまでもありません。やがて、版画研究会はいっさいかっさい禁止の憂きめにあい、入会しているもののうちには逮捕されるものもあらわれて、いまなお釈放されないありさまです。それというのも「ロシヤ人のまねをしている」からだそうです。学校で版画を展示したり、この新らしい芸術の研究会をつくったりすることもゆるされません。この弾圧がどれほど上昇してゆくか、それはむろんあなたがたのほうがよくご存知でしょう。あなたがたのツァーは革命芸術の息の根をとめることができましたでしょうか。中国の青年はそういう革命的な傾向性のある仕事をつづけているのです。

最近われわれは版画を習いはじめたばかりの青年の作品を50点以上集めることに成功しました。パリーで開催予定の展覧会のためにそれをお送りしましょう。パリー新聞の編集者の細君は後でそれをソ連に送ると約束しております。あなたがたは遠からず今年の夏にそれをご覧になれるでしょう

が、その時はこの幼稚な作品にご批評をたまわりたく切にお願い申しあげます。中国の若い芸術家にとって必要なものはあなたがたの指導であり批判と指示にほかなりません。それにつき論文或いは中国の同志たちあての手紙を書けるかもしれないでしょうから、蕭同志を通じ（ロシア語か英語で）われわれあてにお送りくださるようどうかお願い申しあげます。

われわれはあなたがたとの揺ぎない友情をむすびうるものと期待しております。革命の挨拶をもって。

魯迅

1934年1月6日

私自身はロシア語をしらず、ドイツ語がどうやら読めるにすぎません。この手紙は友人のH（アダム・ツァオ^{*}同志）が翻訳しました。あなたがたのお手紙のつくのを今か今かと待ちあぐんでいるのですが、私にはそれも読めなくなるかもしれません。というのは翻訳してくれる友人とは滅多に会えないからです。そういうわけで、できることならドイツ語か英語でお便りをください、翻訳者を見つけやすいからです。しかし論稿をロシア語で書くことはできません、私はツァオにたのみましょう。

そのほか小包には中国の雑誌が数冊入っておりますから、モスクワ在住の蕭同志に次の書付けを添えてご転送^{**}ください。」

以上が魯迅書簡（以下『書簡』とよぶ）の全訳である。これにつき私なりに若干の問題点或いは疑問を提起してみよう。そのまえに補足的にペロウソフの『掘り出し物』を引かしてもらふことにする。というのは、4頁にあるようにパリーで開いた中国の版画展覧会はその後ソ連で開催されたのだが、『書簡』では「遠からず今年の夏にそれをご覧になれるでしょう」と書

* アダム・ツァオは曹靖華のこと。

** 書付けは切られているので、それが受信人に渡されたことは明らかです。

いてあり、そのソ連でひらかれた中国の版画展覧会についてペロウソフが『掘り出し物』に書いているからである。『掘り出し物』は次のとおり書きはじめられる。

「モスクワで中国の版画展覧会がひらかれた。その多くの作品から作者の高い技巧、いかにして建設の情熱を完全に表現しようかという努力、いかにして深刻かつ虚飾なしに新しい人間とその事業を表現しようかといった事どもを伺いしることができた。展覧会においてわれわれの眼にとまったのは、作者の多様さにもかかわらず、その創作方法には民族性があって、主題の提示方法は素朴であり、詩的気分の溢れていることだった。祖国とその自然にたいする愛情のモチーフ、民族的伝統および民族の版画絵画とむすびついたテーマ、そのすべてが中国芸術家の作品に具現されていた。展示品のうちで重要なものは挿画版画であって、とりわけ筆頭にあげるべきものは、魯迅小説の挿画だった。たとえば、有名な古元の『祝福』をテーマにした版画がそれであり、さらにもうひとつ、魯迅小説の挿画になった野夫の『子供を救え』がある。

魯迅の『狂人日記』の挿画は、不具の子供を背後にして、不幸な人の友たるヒューマニスト作家魯迅の物思いに耽る深刻な姿を遠近法で描写している。この版画は魯迅の小説の意味表現では出色のものであり、作者の思想をあらわし、作品の理解に役立つ。魯迅が本の挿画を重視したのは周知のことで、それというのも、挿画というものは作品の芸術形象をおぎない、登場人物の描写をたすけ、作者の描く時代の風俗習慣をよく理解させるからである。魯迅によれば文学を版画に近づかせることが必要だった。挿画の芸術性により書物の意味は補足されるし、またいっそうわかり易くなる。挿画は独特な宣伝広告とならねばならぬ、こうかれは考えた。」

ここに引用したペロウソフの文章は『書簡』にたいするよき解説注釈となろう。それは『年譜』と対比してみてもわかる。『年譜』からこれに関連ある個所をひろうと次のようなものがみあたるだけでごく簡単である。

四月×日“中国革命美術展覧会”在巴黎開幕，該会出品是由魯迅，宋慶齡等所收集的，法国共産党“人道報”曾撰文讚揚。つまりパリーでの展覧会は1934年4月の某日に，中国革命美術展覧会の名のもとにひらかれ，その出品作品は魯迅や宋慶齡が集めたもので，フランス共産党機関紙ユマニテはこの展覧会をたいへん称讚したということである。

さらにモスクワでの展覧会にかんする『年譜』の記事としては，陳烟橋あて1934年6月20日付の手紙が引用されているだけにすぎない。

六月三十日給陳烟橋信中説：“一位美国人告訴我，他從一個德国人聽来，我們的繪画（是北平作家的作品）及木刻，在巴黎展覧，很成功；又從一蘇聯人聽来，这些作品又在莫斯科展覧，評論很好云云。”這裏所説美国人即A・史沫特萊女士。

これで見ると、「これらの作品はモスクワでも展覧され，非常な好評を博したという」とモスクワでの中国版画展覧会につき記している。ついでながらこの『年譜』の誤りを正しておくとし、「六月三十日」というのは「六月二十日」のまちがいであり，また「一位美国人」は魯迅全集では「一個美国人」となっている。また「一位美国人」とはアグネス・スメドレーのことであるから「他」という男性の代名詞でうけるのは明らかに誤りなはずであるが，これは魯迅の故意に出づるものであろう。万一この書簡がその筋の手中におちたばあいスメドレーに迷惑がかからぬようにという魯迅の配慮にちがいあるまい。それはとにかく，好評を博したモスクワでの中国版画展覧会につきわれわれの知りうる唯一のソ連側の記録がベロウソフの『掘り出し物』であることは確かである。これには好評をうけた理由から，展示出品した作品名の主だったもの，魯迅がソ連の版画家たちに求めていた批判，指導，指示といったものさえ暗示されている。もしベロウソフのようなひとがさらに当時の版画家たちの手記や日記，評論などを集めたならば，もっと新たな事実が明るみに出てくるだろう。このひとはエロシェンコについても長年かかってその生涯を調べあげたほどだから，或いは新しい資料を発掘し

てくれるかもしれない。

ペロウソフはさらにつづけて『書簡』がどのような経緯で書かれたかを記している。これは長いが『書簡』に対するよき注釈となるから引かせていただく。

「1934年はじめに魯迅がこういう手紙をソ連版画家によせていたということは、知られてだけはいたものの、その内容にいたっては謎だった。この手紙にどんなことが書かれているかをよりよく知るためには、『鉄の流れ』の中国語訳出版準備の時期、つまり1931年から話がはじまらねばならぬ。ちょうどそのとき、魯迅はセラフィモヴィチの『鉄の流れ』のためにかいたピスカレフの挿画を偶然にも『版画』という雑誌でみた。それらが魯迅の気に入ったのは、小説の精神を的確につたえていることと原文を十分に補足しうる表現性によってである。中国の読者に紹介したいという気持をかきたてられた魯迅は中国語訳本にもそれをおさめることにした。

しかしどうして原画を入手するか。それがなければ鮮明な印象をかくことは必定である。なんとしても原画を必要とする。魯迅はそのころレニングラードにいた友人の曹靖華にピスカレフの版画を4点捜してくれるよう依頼した。作者たるピスカレフ自身に頼みこめば原画は手に入るだろう。魯迅は1931年2月24日付の曹靖華にあてた手紙に書いている。『もし『鉄の流れ』の版画が手に入るとすればぜひ買って送ってください。』その年の6月になっても版画集めがはかどらないので、かれはまた催促をする、『版画が手に入らなければ、最近君にもらったはがきを挿画がわりに用いるとしよう。』

曹靖華のほうではこの手紙をうけとると遅滞なく版画の作者をさがしはじめた。しかしどれほど捜してみても徒労に帰したのだった。絶望しかけたかれはセラフィモヴィチに頼ることにした。というのは『鉄の流れ』のため挿画をかいてくれたひとが何処に住んでいるかセラフィモヴィチの知らぬはずはあるまいと思ったからだ。曹靖華はついに版画の作者の住所を捜しあてた。ピスカレフはモスクワにいたのである。曹靖華は11月にレニングラー

ドからモスクワへ出向いた。かれは魯迅に事の次第を書きつづり、待望の版画を送りとどけることができたのである。」

この待望の版画を魯迅に送れるまでにいたったおもしろい話を曹靖華は語っている。かれはピスカレフの家で『鉄の流れ』の挿画を見ることができたばかりか、ソ連の忠実な友人たる魯迅のために物質欲をはなれた同志としての革命家の精神を發揮したピスカレフにたいして感激の思いを綴っている。「同志、それはちがう、魯迅がソ連の信頼しうる友たることはよく知っていますよ。あなたたちの目的、意図はすっかりわかっております。それはいかほどの金銭よりも貴い。気に入ったものを選んでお持ち帰りください。」これは版画の裏側にしるしてある値段の莫大な数字に氣落ちした曹靖華のようすから事の事情を察したピスカレフのことばである。曹靖華としてはその好意はうけるとしても『礼は往来を尚ぶ』であるから何らかの謝金は出さねばならぬし、それにこの芸術家の『私物を共有化』することは情において忍びかたいものがあつた。金もほしがらず恩を着せることもあえてしない真にプロレタリア国際主義の精神に徹したピスカレフは氣をつかつてこういったものである。「謝金なんぞのことでくよくよしないで下さい。これらの画が中国語訳本にのるとすれば、よい謝礼金になるでしょう。それだけでは不充分だと思ふなら、そしてあなたにできることなら、特に版画用になる中国の宣紙をおくってください。それが私には何よりの贈物になりますよ。」

魯迅の書簡集や日記でこの年代のものにソ連の版画家に送る紙のことが頻繁にでてくるのはこうしたいきさつからである。曹靖華は興味あり記念すべき追憶をさらにつづける。

「版画用には中国の宣紙が最適で世界随一です ——とピスカレフはいった——それは柔かで墨の吸収がよい、……理想的な紙です。しかしわれわれには買えない。同志、ご存知のとおり、われわれは全力をあげて建設に従事しています。でないと、永遠に資本主義の束縛から抜け出せませんし、永遠に立ちあがれません。そういうことから、国家にたいして外国為替を要求し

て宣紙を買うことはできませんし、またすべきでもないのです。しかしわれわれ版画家は中国の宣紙をあきらめきれないのですよ……」

こういうことで、曹靖華は大喜びしその旨を魯迅に伝える。魯迅はピスカレフの好意にむくいるに好意をもってし、版画と引き換えに中国の宣紙を送ることになったのである。

曹靖華のこれらの文章を読んでいると、私は妙な気持になってくる。現在の冷たくて憎しみにみちみちて敵対関係にある中ソの現実を毎日のようにいやというほど見せつけられているわれわれにとって、かつては存在したことのある同志愛とか革命的友誼、或いはプロレタリア国際主義があまりにも対照的に映し出されているからだ。そういう点からすれば、ベロウソフの『掘り出し物』は『書簡』の注釈たるにとどまらず、中ソ文化交流史の記念すべき資料でもあるから、曹靖華の『花』にみえない個所をさらにあげてみよう。

「曹靖華は中国へ版画を郵送するばあい二つの小包に分けた。それは紛失したり中国の検閲にひっかかって没収されることも慮っていたからである。

版画さがしのいきさつと作者の要望をした魯迅は最上等の紙を買いこんだ。当時さすがの魯迅もこの交換がどんな結果をもたらすか予想だにできなかったし、これらの挿画を捜し集めたことから中国においてソビエト版画的の蒐集が本格的にはじめられるようになろうなどとは殆んど思ってもみなかったにちがいない。

1932年4月末魯迅は安徽省産の宣紙と日本紙を450枚買い、6巻きに荷造ってレニングラードへ送った。曹靖華は魯迅の依頼によりその大部分をピスカレフに、残りを他の版画家に分けあたえたのである。」

「魯迅は紙のお返しとして版画の小包を二つ受けとった。それは、ピスカレフの作品73点、ア・クラヴチェンコの作品1点、ヴェ・ファヴォールスキイのもの6点、ペ・パヴリノフのもの1点、それにア・ゴンチャロフの

作品が 16 点であった。」

曹靖華が危惧した小包の紛失や没収が現実のこととしてあらわれたことは魯迅が『引玉集』のあとがきに「もうひとつの小包は郵便局で紛失したのでさがすよすがもない，どんな作者の作品がその中にあったかもわからぬ。」と書いていることから明かである。

「二つめの小包は 1933 年の暮にとどいた。その三カ月前，秋の或る日魯迅は安徽紙をもう一包み送っていた。そのお返しにソビエト版画の大家たちの作品 72 点が送られてきた。魯迅はそのおかげで 版画展覧会を 2 回も上海でひらけるようになったのである。当時としてはソビエトの作品だけの展覧会はひらけなかったので，日本などの版画の間にソビエトのものを陳列しては好ましからざる客の注意をそらさねばならなかった。

魯迅が展覧会を開催した目的は，職業の，とりわけ中国の青年版画家だけにかぎらず，広く社会一般の人びとにソビエトの芸術家の作品を紹介することにあつた。中国ではソビエト文学によってと同じようにソビエト版画によってロシアの実情がわかり，ロシアで行なわれている事どもの意味が理解されていたのである。それだからこそ魯迅は『われわれはもう迷う理由はないだろう』といったのである。ソビエト版画の傑作をした多くの中国人は『幻想の世界から現実の大地に移れる』，そうかれは考えた。ソビエトの版画に表現された工場，ダム，建築物，労働者，住宅，飛行機は説明を必要とせず，それ自身がよく物語っており，人民という大巨匠の空前の成功をしめす宣伝性をおびた作品である。かれらは困難や艱苦に打ち勝ち不屈の意志をもって新しいロシアを建設した人びとなのだ。ソビエト版画に中国人が見たものは，『ソビエト芸術の成果ばかりではない』ことを魯迅はよく知っていた。」

以上にみてきたように，ペロウソフの『掘り出し物』は 1931 年に魯迅が『鉄の流れ』の挿画 4 点をさがすようレニングラード在住の曹靖華に依頼したことから始まり，1934 年のモスクワにおける中国の版画展覧会開

催にいたるまでの経過、経緯を曹靖華の『花』も参考にしながら書いたものであって、中国側の記述を補うにたるものである。

ここで『書簡』とこれに関するペロウソフの記述に腑におちないことが若干あるので、それについてふれよう。

ひとつは、「二つめの小包は 1933 年の暮にとどいた。その三カ月前、秋の或る日魯迅は安徽紙をもう一包み送っていた。そのお返しにソビエト版画の大家たちの作品 72 点が送られてきた。魯迅はそのおかげで 版画展覧会を 2 回も上海でひらけるようになったのである。」という個所である。魯迅の『引玉集』後記をみると、「去年秋間、我才又記得了“鉄流”图，請文学社製版附在“文学”第一期中，這图總算到底和中国的讀者見了面。同時，我又寄了一包宣紙去，三个月之後，换来的是法復爾斯基五幅，畢珂夫十一幅，莫察羅夫二幅，希仁斯基和波查日斯基各五幅，亜歴克舍夫四十一幅，密德羅辛三幅，数目比上一次更多了。莫察羅夫以下的五个，都是住在列寧格勒的木刻家。」とあるから、ペロウソフがこの後記をもとにして書いていることは明らかである。去年の秋、つまり 1933 年の秋に宣紙を一包みソ連の版画家に送って、その三カ月後に ファヴォールスキ その他の人々の作品を 72 点紙のお礼に受取った。これは魯迅がみずから記していることである。ところが魯迅日記にも『年譜』にも 72 点の版画を受けとったことが記してない。ペロウソフは 1933 年の暮にとどいたと書いているが、暮のいつ頃とどいたかも判明しない。それで「1933 年の秋」の月日、せめて月だけでもわかればいくらか助かるのだが、それも判然としない。魯迅日記、それに曹靖華あて書簡『年譜』にもその記載はない。したがって、「去年の秋の或る日」が何月何日か、はっきりしないことには 72 点の版画のとどいた日は断定されない。ただ、魯迅は 72 点の版画の礼状を 1934 年の 1 月 6 日に書いているのだから、そしてその手紙も曹靖華の手を煩わしてロシア語に訳してもらっているのだから、おそらくソ連から送られてきた版画は 1933 年の暮にはとどいたのだろうという推測はつく。だからペロウソフのいう「1933 年の暮

は正しいとみてまちがいないかもしれないが、まだ疑問が残されている。それからお私にとって不審なのは「版画展覧会を上海で2回ひらいた」ということである。『書簡』には送られてきた72点の展覧会をひらいたと書いてあるにもかかわらず、1933年の暮から1934年1月初旬へかけての魯迅日記にはその旨の記事がない。書き忘れたのかとも思われるが、あれほど魯迅を欣喜雀躍させたソ連版画、その展覧会開催の成功、それにつき一言半句も日記にしるされていないのが私にはふしぎでならないのである。もっとも魯迅日記の1933年12月2日には「下午往日本基督教青年会觀俄法書籍插画展覧会」という記事がある。これは1933年12月中の日記で展覧会にかんする唯一の記録である。そしてこれは王士菁の魯迅伝に記すものと一致するのではあるまいか。王士菁は次のように書く。「一九三三年冬天的那一次版画展覧会，便是魯迅一手經營的。因為當時的環境特殊，他把會場分做兩個：第一會場在北四川路千愛里四十五號，作品是德，法，蘇聯等國的版画；第二會場在老靶子路海能路日本青年會，作品是蘇聯，法，比，西，葡，美等國的版画。這一些版画的收集是很不容易的，蘇聯的那一些名貴的版画，由是魯迅託曹靖華先生在蘇聯費了許多心血收集得來的……（481頁）王士菁が「1933年の冬のあのときの版画展覧会」というのは12月2日のものを指すのではなからうか。ただ12月2日の日記は「日本基督教青年会」とあるのに、王士菁は「日本青年会」と書いていること、（もっとも王士菁は基督教の3字を簡単化のためわざと略したのかもしれない。これまでも中国の文人はよくそういう簡略化を行なってきた。それとも書き忘れたか。）それに日記のほうは「俄法書籍插画展覧会」なのに王士菁はただの「展覧会」としていることが問題になる。この2点から12月2日の展覧会はソ連から送られた72点を含むもので『書簡』に記されているものではなさそうに見えるが、他方では「1933年の冬」ということばに私はこだわる。12月2日の日記のほか展覧会につき記すものは、1933年10月14日の日記に、「下午同広平携海嬰往木刻展覧会。」とみえる。そして翌15日にも「下午往木刻展覧会」と記している。『年

譜』はこの日記をもとにしたとみえて次のようになっている。「同月（十月のこと——川上）十四日主办第三次珍藏版画展览会開幕。会場分設上海北四川路千愛里与老靶子路日本青年会两处举行，出品有蘇，法，比，葡，美等国作品。次日又復往展览会。」これを見てただちに気づくことは会場といい出品作品の国名といい王士菁の魯迅伝の記述とおなじであって、ちがうのは月日と「珍藏版画展览会」だけである。「珍藏」の名のつく展览会はこれが第3回であるから念のため第1回と第2回のを『年譜』でしらべてみると、「十月四日主办：第一次珍藏版画展览会開幕。該展览会与内山完造合办，内容有蘇，德，法等国作品，主要是蘇联的本刻。地点設上海北四川路“購買組合”第一店楼上。次日又赴展览会。」とあって、これは魯迅日記1930年10月4日の「与内山君同開版画展览会于購買組合第一店楼上。」と5日の「下午往版画展览会。」にもとづくものであることがわかる。第2回は「是年举办第二次珍藏版画展览会（地点同第一次，時間待考）。」とあって1932年に開かれたことだけをいい、月日は不明で後日の考証に待つとしている。むろん魯迅日記にはそれらしい記載がない。6月4日にはドイツ版画展览会を見にいったこと、6月26日に青年会觀春地美術研究所展览会に広平と海嬰と共に見にいっただけである。第1回、第3回いずれのばあいも魯迅日記の記述に「珍藏」の二字はみえない。これは張望が修飾語としてつけたものか、それとも当時この名の展览会でよばれたのか、その辺のことはわからない。とにかく珍藏の名のつく第3回の展览会，つまり1933年10月14日に開催のものは、『書簡』にいう展览会でないことはたしかである。したがってペロウソフのいう二つの展览会のうちの一つでもないはずである。とすれば12月2日に日本キリスト教青年会で開かれた「露仏書籍插画展览会」のことになりそうである。それでなければ魯迅日記にも魯迅書簡にも書き漏らした版画展览会があったことになろう。或いはそれが真実かもしれない。それは当時上海におられて版画の指導にあたっていた内山嘉吉氏のいちばんよく知っておられることだろうから、内山氏のご教示をたまわりたいところであ

る。それからペロウソフ氏にもご教示頂きたいのは「二つの展覧会」がいつ開催されたのか、ということである。ひとつは『書簡』に書いてあるものであることは自明であるが、もうひとつは1936年2月20日に上海でひらいたソ連版画展覧会も含むかどうか、ということである。

また些細なことであるが一、二つけ加える。『書簡』中の「13世紀の挿画入り中国古書を数冊お送りいたしましょう。それにまた、石版印刷本も3冊お送りするつもりです。」というのには、『年譜』にみえる「1月9日寄莫斯科木刻家垂力舎夫等信、并贈画冊木版本顧凱之画“列女伝”，“梅譜”，“笑堂画伝”，“石印歴代名人画譜”，“耕織図”，等画冊共十七本。」などの書物を指すものであろう。『年譜』によると手紙も本も同じく9日に送ったことになっているが、手紙は6日付であるから、『年譜』は誤りである。本のほうは9日に送られた、それはペロウソフが「後日」と書いていることと一致する。

それから、『書簡』は『北京箋譜』について「2月に出版ということになるでしょう」と書いているが、実際は1月出版のはこびになったから、予定より早まったものとみえる。

以上のようにペロウソフの『掘り出し物』のおかげで、『年譜』の誤りをかなり直すことができた。そういう点からみても張望の『年譜』の信憑性は初稿とはいえあまり高くないのではなかろうか。志賀正年氏の『魯迅業績年表』によると、「1933年10月版画展覧会を開く〔第一会場＝北四川路千愛里四十五号。第二会場＝老靶子路海能路日本青年会。〕とあり、中川俊氏編『魯迅年譜』には、「版画展覧会を北四川路、老靶子路の二カ所で開く。作品は米、ソ聯、独、仏、スペイン、ポルトガル等世界各国の作品を展覧、魯迅の尽力による。（新知書店出版王士菁「魯迅伝」七九）と出ていて、それを1933年10月の事項としている。志賀氏のものは別として、中川氏の年譜は王士菁の魯迅伝によりながら展覧会をば冬でなく10月の事項にしているのはおかしい。こういうことでペロウソフの『掘り出し物』は各方面に波紋

をまきおこしそうである。

最後に、これは最初にちょっと触れたことだが、『書簡』が何年も前に発見されていたにもかかわらず、中国ではどうして公表されなかったか、その結果日本のわれわれもその手紙の内容をしらなかったのはどうしてだったか、ということに一言ふれよう。「魯迅の祖国たる中国においてすら知るものは少ないだろう。」とペロウソフはいう。そのことばに誤りはあるまい。ペロウソフの著書が1963年に刊行されたということから、われわれは即座に中ソの公開論争を思いおこす。中ソ公開論争は正確に言えば1962年12月からとされるが、安藤彦太郎氏によれば「1960年4月、『紅旗』が発表した『レーニン主義万歳』と題する論文は、国際共産主義運動の総路線をめぐる中国の見解を系統的にあきらかにして、なかば公然の中ソ論争が火を吹き、同年6月ブカレストで開かれた共産党会議はその激烈な論戦の場となった。」ということで、事実上の公開論争は1960年にはじまっていた。だから『書簡』が中国においてあまり知られなかったことと中ソのイデオロギイの論争とは無関係でありえない。中国は意識的にこの『書簡』を無視したのではなかろうか。そう断定してもよいようなふしがある。それというのは、1956年のソ連共産党第20回大会にはじまる中ソのイデオロギイの対立から、ソ連は一方的に圧力を加えプロレタリア国際主義をふみにじる数々の所業におよんだからだ。すなわち、ソ連は国防新技術にかんする協定を一方的に破棄し、原爆のサンプルと原爆生産の技術資料の提供を拒否し、中国にいた約1,400名のソ連専門家を事前通告なしに1カ月以内に青写真もろとも引きあげさせる等々で、「それは1964年になっても中共中央に、ソ共中央宛書簡のなかで、『中国人民はいまあなたがたが専門家をひきあげたためにうけた傷あとをいやしたばかりである。すぎさった出来ごとの記憶はいまなおなまなましい』と書かせたほどに強い衝撃をあたえたものであった。」(安藤彦太郎、プロレタリア文化大革命、大安、1967年、47-48頁)このつよい衝撃にひたすら耐えぬくことをしいられていた中国に『書簡』が公然とあらわれ

ることはまずなかったであろうとは容易に推測しうることである。そのような時期に『書簡』が発見されたということは不幸であった。書物にはそれぞれの運命がある、とペロウソフはいう。書物に運命があれば、むろん書簡にも運命があろう。この『書簡』は時機を失して発見されたということで魯迅書簡のうち薄幸も最たるものであろうし、凄愴な人間社会の運命を背おっていることでも最たるものであるにちがいない。

1969年8月

附記 王士菁の魯迅伝 481 頁にみえる「老靶子路海能路日本青年会」の日本青年会というのは日本基督教青年会と別物ではない、つまり同一なものとは私には思われたので、この旨内山嘉吉氏にご教示をこうた。すると、先生は手元に資料がなく確かめられないが、とことわられて、次のようなご返事を下さった。

「御尋ねの日本基督教青年会は御言葉通り老靶子路を東に入った所でありました、魯迅さんの資料が手元にありませんので確かめられませんが王士菁の文章にあるものと同一と考えられます。」

本論で疑問とした10月の木刻展についても、「十月の木刻展もちょっと記録してありますが、これも資料が手元になく確実な御返事を差上げられないのが残念です……」ということで、後日内山先生がおしらせ下さるそうだから、やがていろいろと不明な点が明らかになると思う。

引用した中国語のうちには活字がなくて日本の略字を用いたものがある。

